

申請事業の計画書

ドキュメンタリー映画『女を修理する男』上映会

—紛争下における性暴力、天然資源とグローバル経済を考える—

(2016年4月20日現在)



デニ・ムクウェゲ氏 同氏はコンゴ民主共和国東部のブカブを拠点に活動中

事業内容

コンゴ民主共和国（以下、コンゴ）人の婦人科医、人権活動家、かつノーベル平和賞受賞者候補者のデニ・ムクウェゲ（Denis Mukwege）氏を描いたドキュメンタリー映画、“The Man who Mends Women”（<http://mukwege-themovie.com//index.html>、『女を修理する男』、2015年製作）を全国の大学や非政府組織（NGO）などで上映する。映画上映を通して、性暴力、紛争鉱物とグローバル経済の関係性に関する認識を広め、性暴力の防止策について考える。

事業の目的と効果

本作品は、暗殺未遂にあいながらも、医療、心理的、そして司法的手段を通して、ムクウェゲ氏が性暴力の生存者を献身的に治療する姿を映している。それに加えて、本作品では生存者の衝撃的な証言、加害者の不処罰の問題、希望に向かって活動する女性団体、そしてこの悲劇の背景にある「紛争鉱物」の実態も描かれている。

コンゴ戦争が勃発してから本年2016年で20年が経つ。その間、紛争鉱物の実態に関する認知は高まり、国際社会はその予防策に取り組んできた。しかしコンゴ東部の状況は改善されないまま、この地域に住む人々の苦しみは続いている。特に**紛争鉱物とグローバル戦争経済と組織的な性暴力の関係性**については、ほとんど知られていない。

本作品上映会の日本社会における**短期的効果**は、性暴力と紛争鉱物の関係性に関する議論の促進と、意識の向上が挙げられる。また**中長期的効果**に関しては、紛争下の性暴力の防止策を探

るために、任意団体「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の学生メンバーが上映に加えて、紛争鉱物とグローバル経済の関係について研究を進めることが挙げられる。過去にコンゴの紛争資源などの研究や調査に従事した NGO や企業などを招いて公開勉強会を開催し政策提言を行うことにより、この問題に関する社会的認識を高めることが期待できる。

事業計画（2016年）

2月上旬に、有志で任意団体「コンゴの性暴力と紛争を考える会」を設立し（詳細は本計画書の5ページ参照）、下記の計画を立案した。

映画上映の許可に関して、既にベルギーの映画製作会社や監督と連絡を取っており、上映代（1回につき250ユーロ約32,000円）を含む合意は3月25日に結んだ。

上映会のイベントとして、5月20日に立教大学で「世界の紛争下における性暴力の課題」のシンポジウムを開催し、「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の秋林と米川が、それぞれ世界の紛争と性暴力の課題とコンゴの事例について発表し、学生がコメンテーターとして参加する。

6月3日に同大学で**上映会のキックオフ・イベント**を開催し、その後、全国の大学で上映会を開催する。他大学における上映代は、クラウドファンディングの資金、あるいは大学研究予算などを使用する。幅広く参加を呼びかけるために、ソーシャルメディアを利用して積極的に告知し、また上映会後には映画の解説も含めたトークを行う。

同会で活動する学生は4月から半年間、紛争鉱物とグローバル経済に関して研究を進め、11月頃に**学生企画の一般公開勉強会**を開催する。

2015年4月現在、宇都宮大学、岡山大学、神戸外国語大学、静岡県立大学、上智大学、同志社大学、東京大学、長崎大学と早稲田大学の**9大学が上映誘致**の意思を示しており、さらにその数が増加する可能性がある。あいち国際女性映画祭2016でも上映される可能性が高い。11月25日の**女性に対する暴力撤廃の国際デー**、あるいは11月25日ー12月10日の**性差別による暴力廃絶活動の16日間**に、少なくとも上映を1回予定している。

以下は計画年表である。

2016 年月	字幕翻 訳	広報、資料作り	資金集め	上映会	研究・発表
3月	翻訳		クラウドファンデ	他大学や NGO への	
4月	加工・ 収録	HP、ソーシャルメディアの立 ち上げと発信(12月まで)	ィング、企業回り、 カンパ集め	呼びかけと調整(12 月まで)	勉強会
5月		ポスター、チラシとパンフレッ トづくり		立教大	シンポジウム(立教大)
6月		メディアとメルマガなどへの		他大学とあいち国際	
7月		掲載		女性映画祭で上映	
8月					
9月					
10-12 月					公開勉強会(立教大) 報告書作成、HP公表

事業予算

予算の内訳は下記のとおりである。

運営費	額
字幕翻訳費	100,000
字幕加工費	201,960
字幕収録完成	162,000
DVD 送料(ベルギー・日本)	3,000
ポスター印刷: 300部	48,000
チラシ印刷 A4: 3000部	9,000
資料費: 1000部	20,000
上映費(32,000円/1回 x 8回)	256,000
人件費	150,000
雑費	100,000
合計支出	¥ 1,049,960

2016年3月下旬現在、アフリカ基金から10万円、大竹財団から15万円、そして国連広報センターから35万6000円、計60万6000円の資金協力を確保している。

立教大学における他の事業の実績

立教大学では、「コンゴの性暴力と紛争を考える会」代表の米川が2014年と2015年にそれぞれ、「ルワンダのジェノサイドと国際協力—残虐行為と難民流出をどう予防すべきか—」と「なぜアフリカの紛争が長期化するのか?—大国の役割の観点から考える—」という国際シンポジウムを立案・企画した経験を有する。どちらのシンポジウムでも、世界的に著名な海外の専門家

を招聘し、全国からそれぞれ 232 名と 172 名を集客した。両シンポジウムの報告書（日・英）を作成し、大学のホームページに掲載することで海外にも活動・研究成果を発信している。

「コンゴの性暴力と紛争を考える会」の学生メンバーの数名も、上記のシンポジウムの運営への参加や、あるいは自ら企画を立て 215 名を集客した経験を有しているため、既に教員と学生ともに企画力と実践力を備えているといえる。

事業の背景：紛争下における性暴力、コンゴの性暴力とムクウェゲ氏の活動

武力紛争下の女性に対する性暴力が、「戦争の武器」として意図的な戦略に利用されている事実は今では広く認識されているが、国際的に注目を浴びたのは 1990 年代に入ってからである。それ以降今日にかけて、国際社会ではさまざまな進展が見られている。例えば、国連が設置した 1990 年代初めの旧ユーゴスラビア内戦における戦争犯罪を裁く旧ユーゴ法廷（ICTY）と、やはり 1990 年代初めに起こったルワンダ内戦での戦争犯罪を裁くルワンダ法廷（ICTR）では、武力紛争下の組織的性暴力の罪が問われた。1998 年の国際刑事裁判所（ICC）のローマ規程では、人道に対する罪や戦争犯罪に「性奴隷制」や組織的性暴力が含まれた。2000 年には国連安保理で、武力紛争下での性暴力から女性・少女を保護する重要性を謳い、また加害者を確実に罰し性暴力に関する「不処罰」の連鎖を終えるための各国政府や国際機関が責任を果たすように要請する決議 1325 号「女性・平和・安全保障」が採択された。日本政府もその決議 1325 号等の履行に関する行動計画を 2015 年に策定している。そして、2014 年には「紛争における性暴力停止のためのグローバルサミット」がイギリスで開催されている。

このように紛争下での性暴力撲滅に向けた取り組みが少しずつ立ち上がっているものの、「世界のレイプ中心地」「女性と少女にとって世界最悪の場所」とも描写されるコンゴ東部において、1996 年以降のコンゴ戦争以降、無差別な性暴力が日常化している。そのため、コンゴ東部の女性の 3 人に 2 人は性暴力の犠牲になり、その数は計 40 万人以上とも言われる。紛争が長期化する理由の一つに、コンゴ東部が、携帯電話やパソコンなどに不可欠な天然資源を有し、グローバル化と共に、さまざまなアクターが稀少金属の搾取に関与している事実が挙げられる。いわゆる「紛争鉱物」や「資源の呪い」に関する認識は 1990 年後半以降、一般的に高まり、キンバリー・プロセスなど国際的な取り組みが実践されたが、現地では人々の苦悩は続き、性暴力も続いている。

そのような状況下で、婦人科医のデニ・ムクウェゲ氏は 1999 年、コンゴ東部のブカブにてパンジー病院を設立し、これまで 4 万人以上のレイプ被害者を治療し、精神的ケアを施し続けてきた。より良い医療をより広い範囲の被害者に提供するために、2008 年にパンジー基金も設立した。被害者の保護活動だけでなく、本問題の根本的な解決のために、ムクウェゲ氏は国連本部をはじめ世界各地でレイプ被害に関する演説を行い、女性の人権尊重を訴えてきた。その活動が国際社会で評価され、これまで国連人権賞（2008 年）、ヒラリー・クリントン賞（2014 年）、サハロフ賞（2014 年）などを受賞した。ノーベル平和賞の有力候補にも数回挙がっている。

任意団体「コンゴの性暴力と紛争を考える会」

活動主旨

活動目的：コンゴ民主共和国（以下、コンゴ）人の婦人科医、人権活動家、かつノーベル平和賞受賞者候補者のデニ・ムクウェゲ氏のドキュメンタリー映画『女を修理する男』を全国の大学や非政府組織（NGO）で上映する。映画上映を通して、性暴力、紛争鉱物とグローバル経済の関係性に関する認識を広め、性暴力の防止策について考える。

活動期間：2016年2月1日～2016年12月31日

所在地：東京都豊島区西池袋3-34-1、21世紀社会デザイン研究科、米川正子研究室

連絡先：03-3985-4144 (tel)、congomm2016@gmail.com

後援団体：特定非営利活動法人アフリカ日本協議会、公益社団法人アムネスティ・インターナショナル日本、わたしの戦争と平和資料館、日本学生平和学プラットフォーム、ヒューマン・ライツ・ウォッチ、ビジネス・人権資料センター、認定NPO法人テラ・ルネッサンス、毎日新聞社
代表者：米川正子（立教大学特任准教授）

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）コンゴ東部のゴマ元所長。ルワンダ、コンゴ共和国、スーダンとタンザニアなどでも約10年間、難民や国内避難民の保護や支援に従事。日本平和学会理事。研究分野は国際関係論、特にコンゴやルワンダの紛争、平和、難民やと人権問題。主著は『世界最悪の紛争「コンゴ」－平和以外に何でもある国』（創成社、2010年）。

アドバイザー：八角幸雄（アフリカ協会特別研究員、フランス語通訳）

青年海外協力隊経験者、元外務省職員。第2次コンゴ戦争時（1998－2002年）のコンゴを含むアフリカ・フランス語圏諸国やベルギー等の日本大使館に約20年間在勤。『女を修理する男』の字幕翻訳を担当。日本における上映に際して、映画の共作者であり長年の友人である、コレット・ブラックマン女史（元ル・ソワール紙（ベルギー）記者）や製作会社と交渉。

アドバイザー：秋林こずえ（同志社大学大学院教授）

世界最古の国際女性平和団体「婦人国際平和自由連盟（Women's International League for Peace and Freedom）」の会長。専門分野は、軍隊と性暴力、安全保障の脱軍事化、女性たちのグローバルな平和運動。主要論文は「ジェンダーの視点と脱植民地の視点から考える安全保障－軍事主義を許さない国際女性ネットワーク」『平和研究 安全保障を問い直す』（早稲田大学出版会、2014年）。

アドバイザー：華井和代（東京大学大学院特任助教）

元高校教師。コンゴ東部での紛争状況から、国連による紛争解決への取り組み、各国政府や企業による紛争鉱物取引規制の実施状況、先進国における消費者の認識調査を研究。主要論文は「平和の主体としての消費者市民社会－コンゴの紛争鉱物取引規制をめぐって」『平和研究 平和の主体論』（早稲田大学出版会、2014年）。

学生メンバー（事務サポートチームと研究チーム）：立教大学学生、明治大学学生8名。